

“瀋陽からニイハオ”

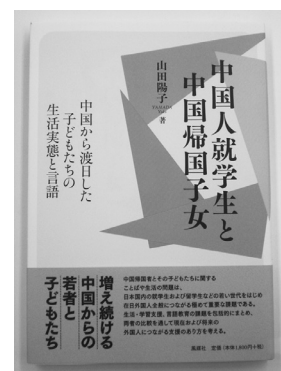
日本で『中国人就学生と中国帰国子女』を出版して

山田 陽子

2010年6月に日本で出版しました『中国人就学生と中国帰国子女—中国から渡日した子どもたちの生活実態と言語』という本についてご紹介させていただきます。

本書は、ヒトとモノの国際移動によるグローバル化が進展した日本で、どのように生活やことばの支援を行っていけばよいのかを言語教育の具体的な実践例から考えようとしたものです。

まず、日本の地域社会で生活する「中国人就学生」と「中国帰国子女」の生活実態を調べました。中国から日本に来た若者・子どもたちは何を思い、どんな生活をしているのでしょうか。中国からの渡日者は増加し続けていますが、私たちの身近に住んでいるにもかかわらず、かれらの生活ぶりは意外と知られていません。そこで、かれらの日本における生活実態を把握して、どのような支援が必要なのか、私たちに何ができるのか、現在および将来の外国人問題に生かせる施策とは何かを考えました。



本書の内容は長野県と愛知県での5年間にわたるフィールド調査（聞き取り調査、面接質問紙調査、史資料調査等）からの知見によるものです。長野県は周知のとおり満洲移民を多く送出したところですが、長野県の小さな村が実践した中国帰国子女教育から、外国にルーツをもつ子どもたちの支援に生かせる数々のヒントを得ることができました。ここでは、満洲引揚者が日中正常化以降に帰国した人たち（中国帰国者）に生活や言語の支援を行なっていました。

愛知県でのフィールド調査では、60数名の中国人就学生ひとりずつに聞き取りを行ない、日本語学校での学習と中国帰国子女教育の学習目的・学習方法・教育の担い手等を比較することで、中国人就学生にはどのような支援が望ましいのかを考えることができました。

本書は日本社会と中国社会を架橋する「若者・子ども」が主人公です。第Ⅱ部に登場する中国帰国子女は、「中国黒龍江省ハルビン市方正県」から渡日した子どもたちです。黒龍江省で私が実際に撮影した開拓団部落の写真も掲載しました。

私は2010年4月から中国遼寧省瀋陽市の東北大学（日本語学部）に赴任し、中国全土か

ら集まった大学生と大学院生に日本語科目と言語学を教えています。東北大学は、「張学良」が1920年代に築いた大学です。満洲（中国東北部）から帰ってきた人たち（満洲引揚者、中国帰国者）のことを勉強していた私が、まさか、満洲の中心都市であった瀋陽（奉天）に住む機会を与えられるとは思ってもみないことでした。

瀋陽に赴任して3カ月経った7月には、「瀋陽日本人会交流会」が開かれ、在瀋陽日本国総領事のご臨席のもとに約100名の在瀋陽日本人が集まりました。大学教員は私ひとりで、あとは日系企業の駐在員とご家族でした。アジア最大の重工業都市として知られる瀋陽だけに、電器会社、自動車タイヤ・モーター・ゴム製品・工業用ペンキ・電子部品製造、建築機械会社などの日系企業が進出しています。東北大学も日本の大学や企業と学術交流、技術提携などを積極的に展開しています。

9月には、東北大学主催の国際シンポジウムが開催されました。多くの日本人研究者が中国人研究者とともに研究成果を発表し議論しました。私も国際シンポジウムの運営補助や研究論文を通じて、日中両国の文化を比較する楽しさを味わいました。

東北大学から少し離れますが、黒龍江省の「方正日本人公墓」にはこれまで二度参りました。中国に日本人公墓があることは中国人大学生の誰も知りません。毎年多くの日本人が公墓を訪れていることを教室で話しますと、そのような草の根の日中友好交流が長年続いていることに、学生たちは驚愕するとともに深い興味をもって聞き入っていました。

厳しい風土の瀋陽で、中国人大学生にサポートしてもらいながら何とか生活をしています。日本の大学で中国人留学生を教えていた経験から、中国で日本語を学ぶ中国人大学生と日本の大学で日本語を学ぶ中国人留学生との違いも感じています。本書は、私が実際に働いてきた日本語教育現場のリアルなエッセンスがいっぱい詰まった本になりました。他にない調査データを豊富に掲載しました。インターネットで「中国人就学生と中国帰国子女」というタイトルを検索していただきますと、内容が詳細に出てまいりますので、ぜひご覧くださいますようお願い申し上げます。

書名 『中国人就学生と中国帰国子女—中国から渡日した子どもたちの生活実態と言語』

A 5版 220頁、1800円税別、風媒社（Tel.052-331-0008）

（やまだようこ：中国遼寧省瀋陽市「東北大学」日本語学部教員）